メディカルスタッフが経験した離床時の有害事象に関する調査報告

離床時の有害事象についてアンケート調査を行いましたのでご報告致します。

方　法

2014年8月23日～31日に開催された日本離床研究会教育講座にてアンケートを実施

●設問

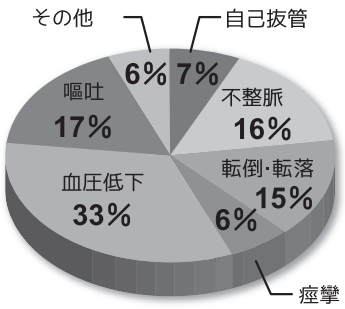
皆さん離床時に下記のような有害事象を経験したことはありますか？

●回答選択肢

自己（事故）抜管、不整脈、転倒・転落、痙攣、血圧低下、嘔吐、その他のいずれかにチェックをする（複数回答可）

結　果

・アンケート回収総数　836
・有効アンケート総数　820



考　察

離床によって起こりうる有害事象はいくつか考えられますが、本調査の結果では循環にまつわる症状である、血圧低下、不整脈、嘔吐が多くの割合を占めています。

起立性低血圧は最もよく遭遇する症状のひとつであり、例えばベッド上から端座位に起きると、下肢（下腿）に約700mlの血液をとられるため、起立耐性が低下していると血圧が低下し、それによって嘔気やめまいが出現します。

また、離床による負荷で交感神経が興奮すると、不整脈を誘発することもあります。永谷[1)]による看護師対象のインタビュー調査においても、本調査と同様に低血圧や不整脈などの循環器系のイベントを多く経験したと挙げています。

転倒転落、自己（事故）抜去等は、環境設定や医療者の意識を変えることによって、予防できるものと考えられますが、循環器系イベントは内的要因であるため、対策は容易ではありません。

循環の安定には心機能、血管、循環血液量の３拍子が揃っている必要があります。

離床前に血圧、脈拍のアセスメントは勿論、加えて脱水や低心機能の把握に努め、リスク管理を十分行うことで、このようなイベントが少しでも回避出来るものと思われます。

また、急激に静脈還流の変化を起こさないためにも、ヘッドアップをうまく利用してゆっくり離床ー臥床の動作を行うことも、循環不安定患者の離床を安全にすすめるコツとなります。

実際にICU入室患者や脳卒中患者、人工呼吸器装着患者においても早期離床は安全に実施可能とされる研究も報告されています[2-4)]。

本調査の傾向とご自身の関わる診療科に起こりうる合併症を照らしあわせ、有害事象を出来るだけ起こさない事前のリスク管理と、離床可否の正確な判断から、不必要な安静臥床が少しでも減らせるように願っています。

文　献

1）永谷幸子．加速度からみた安全な離床援助方法に関する研究

2）Morris PE, et al. Early intensive care unit mobility therapy in the treatment of acute respiratory failure. Crit Care Med. 2008; 36 (8): 2238-43.

3）Julie Bernhardt, et al. A Very Early Rehabilitation Trial for Stroke (AVERT)Phase II Safety and Feasibility. Stroke, 2008 - Am Heart Assoc

4）Pohlman MC, et al. Feasibility of physical and occupational therapy beginning from initiation of mechanical ventilation. Crit Care Med. 2010; 38 (11): 2089-94.

著者情報：飯田 祥＊黒田 智也＊曷川 元＊
＊日本離床研究会 学術研究部